

北海道の海中公園

田村 剛

これまで北海道はかなり広く旅行したつもりだが、海景については、自然公園の一部として観察した程度で、もとより海中を覗くようなことはほとんどなかった。それでも利尻・礼文の旅では、磯の景観や浜に揚げられたコンブなど、私にとっては印象的だったし、知床岬へ上陸する際、舳から透明度の高い浅海の底に海藻類の群落を眺めたときに、初めて海中に観賞に堪える景観のあることを知らされたような気がした。

また知床の旅では、なんといつても遠音別手前あたりから展開するたぐさんの岩礁や、雄大な西海岸の海蝕崖等に群れる海鳥類や岬付近に遊泳する海獣類の景観が異彩を放っているように見えた。けっきょく、海中景観 *underseascap* では遠景というものはなく、海中に潜っても二〇メートルの範囲しか展望できないので、海上に広々と展開する景観 *seascap* に匹敵するものではなく、それは深度に応じた変化する海中生物相の興味に限られるわけであり、これを写真にしても、それだけで、どこのものであるかということは判らないほどの局地的なものである。要するに海中景観は、海上景観を環境として初めて観光価値が見出されるわけである。

さて、北海道の海は亜寒帯ともいえる地理的条件により特色づけられるわけだが、地形上では、岩石海岸として勝れた海域で、海底の微地形が変化に富んでおり、したがって生物相も豊かな五〜十五メートルの浅海に物色されるのである。そして、こころした浅海は、とかく沿岸の漁業者により自然は破壊されがちであり、磯の生物相を観察するのに好適な海区はあまり残されていない。そして、やや深い海区についても漁業により侵され、原始状態を保持するものはきわめて稀であるといえよう。

こうしたことから、海中公園では一定の地域を指定し、その一部については厳正な保護保存を図ることが肝心であって、まず公園の設定運動はこの趣旨で発想されたわけで、諸外国でも二〇世紀の前半にアメリカや豪州に、海中公園の前身となる国家記念物、または自然保護区の指定を見、一



九五〇年頃にやっとその利用施設が行なわれるようになったわけであるが、いずれも不便な位置にあつて、公園としての利用はそれほど発達せず、早くから行なわれたガラス底船 *glassbottomed boat* くらいが普及した程度であり、海中展望塔 *undersea observatory* などは一九五二年豪州のグレートバリアーリーフ（世界最大の規模）の礁湖中に浮かぶ島に初めて出現し、これを模してカナダのバンクーバー島ビクトリア市郊外に建設されたのが、その二番目である。

ところがわが国では、海中公園センターと日立造船株式会社で計画された塔としてはさらにスケールの大きいものが沖繩・和歌山県で着工され、他県からの要請で次々とその企画はすすめられ、今日では世界のトップを占めようとしている。北海道は緯度が高いが、西海岸は対馬暖流の影響もあり比較的温暖で、年間利用シーズンは短い欠点はあるにしても、展望塔は気象条件に左右されることもないので、都市に近接して利用性が高ければ企業価値もあるわけである。

まず年間、一五万人以上の利用者があれば、その経営はなり立つであろう。この種の施設としては、さらに海底トンネルの構築も設計試験中であり、フロート式展望台や潜水艇を採用する案も出ている。こうした施設は、いずれも億単位の経費を要するので、たとえば小樽近辺の海岸などは恰好かと思われる。グラスボートとなると、今日すでに各地に実現して、簡易なものも数十万円から数百万円で建造されるので、いたるところに出現している。その短所は気象条件により操業が妨げられる点であるが、企業性は十分である。

さて、こうした施設により海中自然が毀されるのではないかの点と安全性があつて、目下検討中である。要するに、学術と観光との調整を同一海区で求めるのではなく、地域制により、保存海区と利用海区とを区別するのが賢明である。

最後に海中公園の生物については、国民大多数は無智であるので、海中を覗く前に、その生物に関する知識をもたせるために、博物館・展示室・水族館などを備えることが望まれる。また現地に博物館に関する指導員を配置するようにもしたいものである。

（海中公園センター・理事長）